様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月１５日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２０２４０
研究課題名（和文）水害要因による北海道移住者の河川とのつきあい方を伝えた伝承について
研究課題名（英文）
How has the migrant who goes over to Hokkaido due to the flood damage associated with the river in Hokkaido afterwards?

研究代表者
池田　貴夫（IKEDA TAKAO）
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：３０３００８４１

研究成果の概要（和文）：明治期の本州以南において、水害により被害を受けたことを要因として北海道に移住した人々は、どのように新天地の河川とつきあってきたのか。本研究は、それらを伝えた諸伝承の存在と意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：How has the migrant who goes over to Hokkaido due to the flood damage associated with the river in Hokkaido afterwards? This study made clear the existence and meaning of folklore that told them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	900,000	0	900,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	510,000	3,110,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：民俗学、環境教育

１．研究開始当初の背景

明治期以降、地震、火災、水害等の災害により地元での生活が停滞したことを契機として、北海道への移住に踏み切った集団移住例が、多くみられる。そのなかでも、水害は、最も顕著に移住を促す要因となっている。一方、当時の北海道の河川はほとんど人の手を加えられていなかったため、北海道での生活に夢を抱きつつも、その後何度も大規模な水害に見舞われた団体が少なくはなかった。

本州でも水害に苦しみ、北海道においても度々の水害に悩まされることとなった人々のなかには、入植地を変える団体や個人が多く見られたが、一方で、当初の入植地にこだわり、本州以南での水害の経験を生かしつつ、その土地に適した生業を興し、また活きる川とともに生きる術を伝承させてきた集団も見られる。その顕著な例としては、余市川水系の仁木町に移住した徳島県吉野川流域の阿波団体、石狩川水系の新十津川村に移住した奈良県十津川村団体、尻別川水系の倶知安町に移住した山梨団体などが挙げられ、それぞれ、入植以降現代に至る河川とのつきあい方には、学ぶべき点が多い。

しかしながら、これまでの北海道史のなかでは、水害に苦労させられた史実は記述してあっても、その苦労ゆえに成すことができた河川とともに生きる地域づくりの実践過程は欠落したままであった。

２．研究の目的

(1)本研究は、明治期の本州以南において、水害により人的、経済的、物質的、精神的被害を受けたことを要因として北海道に移住した地域集団が、新天地の生活環境にどのように対処し、河川とどのようにつきあってきたのか、地域を限定して、それらを伝えた諸伝承の存在と意義を明らかにすることを、第一義的な目的とした。

(2)また、地球環境が不安定となりつつある現在、現代日本人の防災・減災意識を高め、環境へのまなざしを深めるため、それら先人のなしてきた河川とのつきあい方を災害教育、環境教育に活用するための方法論を構築することを試みた。

３．研究の方法

(1)研究を進めるにあたっての前提として、本州以南の過去の水害と北海道移住の関係についての調査を行った。そして、徳島団体、奈良県十津川村団体、山梨団体など、明治期の大規模な水害を原因として北海道に移住した団体について、河川とのつきあい方を伝えた民俗事例の存在とその意義を明らかにした。また、各移住団体の河川とのつきあい方の理解を補強するため、母村である徳島、十津川、山梨などにおいて、明治期の水害の実態と民俗の調査を行った。

(2)奈良県十津川村団体については、開拓当時の石狩川とのつきあい方を反映していると思われる「玉置神社奉祀之景」絵馬（新十津川町開拓記念館所蔵、町指定有形文化財）の詳細な解釈を行い、その存在意義を明らかにすることを試みた。

(3)河川や湧水のない台地に長く水路を築き、水田を開いた奥尻島米岡地区における人と自然とのつきあい方を伝えた伝承を拾い上げるため、現在米岡神社に残り、水田稲作をはじめた頃の人々の思いを反映していると思われる開村紀念奉納句集（昭和初期）を詳細に記録・翻刻のうえ解釈を行い、その存在意義を明らかにするとともに、現在でも伝承されている水田稲作とその水利に関する調査を行い、その民俗自然誌と民俗精神誌を記録した。

(4) 民俗伝承が、家庭、町内会、小学校、中学校の災害教育、環境教育の実践にどのように活かされているかについての調査を、並行して行い、本研究で明らかとなった諸伝承の災害教育、環境教育への活用について、考えた。

４．研究成果

(1)水害要因による移住集団の出身地、入植地、入植年、移住人口、主要従事生業、北海道でのその後の水害被災事例を把握できるデータベースを作製した。

そのうえで、明治期の大規模な水害を原因として北海道に移住した徳島団体、奈良県十津川村団体、山梨団体の入植地の決定、開拓と生業の実態、アイヌ民族との関わり、移住先の近隣河川である余市川、石狩川、尻別川の氾濫の経験、河川をめぐる防災・減災対策の経緯についてまとめた。また、現在に残る（あるいは過去にあった）被害伝承、防災伝承、水害予兆伝承、その他水害に関する口承、書承、ならびに年中行事、神社祭祀、寺院祭祀、民間信仰、その他物質文化に見られる諸団体の河川とのつきあい方を伝えた民俗事例の存在とその意義を明らかにした。

(2)新十津川町開拓記念館所蔵の「玉置神社奉祀之景」絵馬は、奈良県十津川村の大水害に見舞われ北海道に移住したはずの十津川村団体が、石狩川流域の河跡湖に囲まれた極めて水害に見舞われやすいシスン島という場所に地元奈良の玉置神社の分霊をあえて祀り、新たに玉置神社を創建したことをビジュアルに描いたものである。

解釈・分析した結果、当時の十津川団体の心的伝承物かつ歴史資料という両面性を持った絵馬であり、開拓初期の風景、風俗をも描いた、北海道でも数少ない貴重な文化資源として意義づけられた。また、歴史的には、新十津川村に入植後10年に満たないわずかな期間ではあったが、新天地での未来の生活にむけて団結できていた頃の風景と心性を、また念願の玉置神社の創建を実現したつかの間の喜びと希望をカンバスに表現した存在と、位置づけられた。

一方、あえて水害に見舞われやすいシスン島という場所に玉置神社を創建した現象については、①神域としてのふさわしさを見出した、②シスン島を有効利用するという思想が根底にあった、③神社を山に建てることをあえて嫌った、④奈良県十津川村と異なる平野を新天地とし、まさに水に囲まれたような環境下で、生産物の根源たる水との調和を望んだ、⑤さらには、同じく明治期の十津川村大水害で熊野川下流に位置して流されてしまった熊野本宮大斎原を意識して水に囲まれた川社としたなど、川ないし水害とのかかわりの面で、多様な心性が複合的に作用した可能性を指摘することができた。

(3)奥尻島米岡神社の開村紀念奉納句集の解釈、および５月に行われる水路清掃行事や９月の神社例祭の参与観察をはじめ、季節に応じた奥尻島でのフィールドワークを重ね、そのデータをもとに考察を行った結果、奥尻島米岡地区における水田稲作の民俗としての意義を、次のとおり明らかにした。

米岡地区は戦後の大規模な水田整備の影響をほとんど受けず、基本的には奉納句集の時代からの水田の基礎的形態を継承している。水路による水利システムも、水田造成期から変わっていない。水田の立地などの地理的条件については、米岡地区の北海道の水田を見まわしても、ほとんど類のない類型に位置づけられる。そして、結果的に水不足こそ頻繁に経験するも、洪水のない水田を生み出し、継承されてきた。なお、このような水田が作られたことについては、明治30年代前半の北海道大水害の被害を受けた石狩、倶知安方面からの農業移民が奥尻島に再入植していることとの関連性も考慮に入れておく必要があることを付記しておく。また、水田造成時の人々にとって、水田稲作に対するどのような思いが複合的に宿っていたのか、開村紀念奉納句集から明らかとなった。

巨視的には、奥尻島は日本の離島として水田稲作に成功した最北の地であり、このような辺境で試みられた技術と心性は、日本人や日本文化を見直すうえで重要な要素となる。また、定住に至る過程の文化論、移動する日本人の精神性の解明につながる事例である。さらには、時代が進むに従って「労苦」と「功績」などの表現で美化（単純化）して語られがちな北海道開拓というものを、奉納句集などをとおしてより多面的、多角的にとらえることができるなど、開拓とは何だったのかという大きな問いに対して、さまざまな知見を与えてくれる事例として位置づけられる。

一方、開村紀念奉納句集については、神社および句集自体の傷みが激しい一方で、上記のような米岡水田の意義を伝承し、また今後の環境教育に活用しうる文化資源として位置づけられるため、その継承の必要性を地域に対して普及した。

(4)これら本研究で明らかになった川とのつきあい方に関する諸伝承は、現代日本人の防災・減災意識を高め、環境へのまなざしを深めるため、地域や学校での災害教育、環境教育に活用することが有効かつ可能であり、地域に対しては、本研究成果を積極的に普及した。また、民俗伝承を災害教育、環境教育などに役立てていくためには、上記の「玉置神社奉祀之景」絵馬や奥尻島米岡神社の開村紀念奉納句集といった説得力のある文化資源の存在と意義を明らかにしていく努力を重ね、その成果をもとに、それらの資源を積極的に活用することが、有効な方法の一つであることを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 池田貴夫「中国黒竜江の洪水と赫哲（ホジェン）－古老の話に隠されたなにげない自然の論理－」『北海道開拓記念館だより』37 巻 3 号、5－5 頁、2008、査読無。
② 池田貴夫「新十津川町開拓記念館所蔵『玉置神社奉祀之景』絵馬の意義－その描かれ方と神社の立地をめぐって－」『北海道開拓記念館研究紀要』第 37 号、69－82 頁、2009、査読無。

〔学会発表〕（計２件）

① 池田貴夫「北の離島における水田稲作の展開－奥尻島米岡地区の事例－」日本民俗学会第 60 回年会、2008 年 10 月 5 日、熊本大学。
② 池田貴夫「新十津川開村時の神社創建と奉祀の様相－それを描いた絵馬から考えさせられること－」日本民俗学会第 61 回年会、2009 年 10 月 4 日、國學院大學。

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
池田　貴夫（IKEDA TAKAO）
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：３０３００８４１

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：